

## ～日本語俳句と外国語俳句～

呉昭新 (医師・俳人)

11月号では台湾俳句での季題・季語、歳時記が確立するまでをご紹介致しましたが、今月号では、日本占領下と戦後の状況下に翻弄されつつも乗り越え、俳句が台湾の俳句として定着してきた歴史をご紹介します。

### 5. 跨言語世代の俳句：

話は戻って、一夜にして文盲になった文芸作家や愛好家達のうちで、筆を捨てた人もあったが、また多くの人が筆を握り直して新しい言語に一から挑戦した、そして多くの人たちがその障害を克服したのだ、いわゆる跨言語世代の人たちであった。詹冰、巫永福、陳千武、林亨泰、傅彩澄、蕭翔文らは俳句界における二刀流の使い手である。別に黄靈芝は日本語の俳句を主に、後に漢語俳句をも詠むが、彼が俳句を詠み始めたのは戦後でありまた戦後台湾唯一の俳句結社の主宰である。

(以下黄靈芝、詹冰と朱実について個別に述べるが、紙面制限のため、詳細なる記述はネット版をご参考下さい、<http://oobooshingo.blogspot.tw/2014/12/blog-post.html>。また黄氏と台北俳句会の部分は本誌6月号をもご参照下さい。)

#### a) 黄靈芝と台北俳句会：

跨言語世代に居座りながら、いまだに日本語を使う人々を台湾の「日本語族」と研究者たちは呼んでいる。なかんずく、これら「日本語族」の一人である黄靈芝は1928年生れで本名黄天驥、日本人よりも造詣の深い日本語を駆使して俳句に馴染んでいるのである、そして1970年以来43年間、戦後唯一の組織ある日本語俳句結社「台北俳句会」の主宰でもある。

周知のように、当時の台湾は国民党政府の戒厳令の下で、結社どころか、日本語に関する資料の流通さえも禁止されていた。それにもかかわらず、黄氏は台湾で日本語の俳句会を創設した。当時の状況の厳しさは、俳句会の命名からも一端が伺える。メンバーは台北だけではなく、台中、台南にも多く、全島に及ぶのに、どうして「台北俳句会」と名乗ったのか。このことについて、主宰の黄靈芝氏は、「実質的には会員が全島に跨り、『台湾俳句会』であるべきだったが、当時「台湾」の二字には反国思想の嫌疑がまことしやかにかけられやすかったため、殊更にこれを避けたのであった」と説明している。黄氏の俳句について特記するところは正式に師匠を持っていない事で、すべて自習によるものであることである。終戦後大学に入学したものの、間もなく肺を患って休学せざるを得なかった。その後咯血などを経験しながら、長い間肺結核の養生の途にあった。かれは不幸のようでその実幸運児であった。かれは台南で一二を争う大資産家の末っ子で上には八人の兄弟姉妹がいた、終戦後二年で相次いで母と父を亡くしたが、同時に残された膨大な資産と骨董玉石、加えるに天賦の芸術の資才、彼は日本に送還される日本人の蔵書家の膨大な蔵書(荷車二台、千冊近く)を一括して買収し得たのだ。私が想定するに彼は病床にあってこれら知的財産を全部精読、その真髓を吸収し、すべてを物にしたと(自

分では乱読したと言っている)。玉石に関する能力も家蔵の骨董玉石からの実際経験と書籍からの知識によるものと思う。彼の小説にはよく金銀玉石が出てくる、また博物館の玉石の解説もされている。彼の芸術に関する天賦の才に加えるに、資産が彼の今日をあらしめたのだ。彼の博識多才はその著述と句評の内容からも窺い知れる。彼の句作や小説の真髓内容を本当に了解するには、彼の一般に知られる出自の他に彼の生い立ち環境をよく知らなければならない、私の知る限り彼の作品に関する今までの一般の解釈はまだまだ足りないところがある。惜しむらくは、「台北俳句集」と黄氏の創作のほとんどが自家出版であるため日本ばかりでなく、台湾でも知るものもまれである。貴重な文献がみすみすなくなるのを見るに忍びず、私が入会后、40周年記念集は私自身でスキャンして個人のウェブに載せた(2012年の末、若い人が幹事になったあとはネットでも作品が読めるようになったようだ)。2011年の末から黄氏の健康が思わしくなり、会に出席するのも無理になり、2013年には会の世話役も高齢のため日本留学帰りの若いかに幹事の役を引き渡した。若い方は新しい媒体のツールが使えるゆえ、句会の事務のやり取りも便利、迅速になったが、主人のいない家はやはり寂しい、なんとか在台、在日日本人に助けを借りて維持しようとはがいている模様だが、当初からみんなが心配していた日が迫って来たようだ。日本人が主になるようなことになったら、それは真の台湾俳句会ではなく日本語習得の場でしかなく、または日本人懇親のクラブのかたちになってしまい、そこに参加する台湾人は日本語練習のための参加であり、台湾俳句会の意義をなさない。

#### b) 詹冰：

ここで提起したいのは詹冰である。詹冰本名は詹益川(1921~2004)、中学生時代から詩が好きで、

台中一中在学中にすでに俳句募集に応じて受賞していた。東京の明治薬専に学び薬剤師になったが、留学中に大いに詩作に励み、その間堀口大学にも文面で教えに預かった。1944年帰台後まもなく国籍転換に遭い、詩作に使い慣れた日本語から華語に切り替えざるを得なかったが、よく困難を克服して、亡くなるまで華語で詩作を続け多くの児童詩や新詩を残した。ここで特記したいのは彼が漢字十字で漢語俳句を詠んで、それを「十字詩」と名づけたことである。生前彼は評論家莊紫蓉の詹冰訪談録において日本の俳句を翻訳したのが十字詩だと、そしてどう違うかと問われたとき：「詩境に違いはなく、詠みおわっていない部分は山水画の留白に相当し多くの想像空間を残している、これが十字詩だ、私は300句を越す十字詩を詠んでいるが発表されたのは100句あまりだけ」だと答えている。よく俳句の本質をわきまえているゆえ、漢字新詩型の「漢俳」を俳句と見なすようなことはなかった。

#### c) 朱実(瞿麦)：

朱実は台中一中の学生で文学青年、張彦勳、許世清らとともに1942年文芸団体を発起し、1944卒業間際に会の名を「銀鈴会」ときめ、会誌「ふちくさ」を刊行し、詩、童謡、短歌や俳句創作などが発表された。言語は、初めは日本語であったが1945年に時代が変わると中国語に変わったが、1949年4月「四六事件」で当局による手入れが入るとメンバーは散りぢりばらばらになり、ある者は捕らえられ、果ては銃殺されるものもいた、またある者は島内や中国へと逃げのびたのである。当時台湾師範学院(後の師範大学)の三年生であった朱実は機敏で逸早く身の危険を悟り、中国に逃げきった一人で、後に中国で文学活動に従事し、俳句や漢俳の発展に貢献した。彼は中国では別の名を使っていた、瞿麦こと朱実である。周恩来が日本を訪れたとき翻訳をつとめたのも彼だった。

「北京週報日本語版」2008年6月20日に彼の紹介記事が載っている：「1992年4月、日本の伝統俳句協会の一行40数名が伊藤柏翠副会長の引率のもと、瞿麦氏を副団長兼講師として北京、西安、桂林を訪れた。観光後、上海の花園飯店で「中日友好漢俳・俳句交流会」と銘打った催しが行われた。上海の著名な文化人である杜宣、羅洛、王辛笛の各氏ら数十名が参加し、各自が自分の作品を吟じた。これは、中日初の漢俳・俳句交流会であり、また同時に漢俳・俳句集『杜鵑声声（ホトトギス）』を出版して中日の漢俳・俳句交流に新たなページを切り開くものでもあった。日本航空は毎年、「世界こどもハイクコンテスト」を開催しており、すでに10回を迎えるとともに特集本も出版された。瞿麦氏は、中国地区でこどもハイクの評価・選考にあたり、選考した漢俳をハイクに訳して日本航空の審査会へ送る責任者となった。彼は招聘されて日本の国際俳句協会の評議員にもなった。中国の子どもの漢俳に対する興味と愛好を培うため、彼は上海少年宮へたびたび出向き、コンテストに参加する児童を指導したため、上海の子どもらの漢俳は群を抜いており、賞を獲得している。（中略）瞿麦氏が中日の漢俳・俳句交流の道を切り開いたことは、中日文化交流史上に輝かしい1ページを留めることだろう。」

[http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2008-06/18/content\\_128412\\_2.htm](http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2008-06/18/content_128412_2.htm)

朱実は1994年に一度台湾へ帰ったきたことがある、そしてかつての「銀鈴會」の舊友たちに会った、旧友の蕭翔文は日文短歌同人誌「たんがら」に一文を残した。他はまた日本においても、早稲田大學、神戸學院大學、二松學舎大學、岐阜經濟大學中國文學の客座教授の座にあった。彼はまさに激動の世界の渦の中に身を投じた、台湾の跨言語世代が世界俳句界に送りだした台湾、中国、日本三国にまたがる台湾出身の俳人なのだ。彼の俳句に：

半世紀時空を越えて秋思かな  
長かりシタイムトンネル時計草かな  
の句がある。

### (三) 外国語俳句 (HAIKU、漢語俳句)、ネット俳句：

戦前、日本語短詩文芸の教養を獲得し、戦後の言語の推移に馴染めなかった台湾人は「日本語族(人)」となり、その一小部分が日本語短歌、俳句創作に籍を置くことになったのだが、若き日に覚えた日本語にノスタルジアがあっただけなのか私にはわからない。思うに日本の俳句結社と同じではないかと。只暇をもてあましての言葉遊びで句会に参加しているのか？というものもある。

歌人そして俳人の呉建堂（孤蓬万里、台湾万葉集の編者）は確かに詩才の天賦に恵まれ、詩人の性格が普段の言行からはっきりと感じられ、誰も疑う人はない。呉建堂には私だけしか知らない逸話がある。彼は歳も医学も私の4年先輩である、1982年のある日、突然院長室に私を訪ねてきた。彼は当時基隆市立病院の院長で私は台湾省省立台北病院の院長だった。彼とは面識がなかったが、同業なるゆえ院長室へお通ししたのだが、彼の発言にはびっくりさせられた。彼はいう：「あなたの今の院長職を僕に譲らないか」と。私はあっけとられて返す言葉も出ませんでした。こんな常識外れの要求に答えられる筈はなかった。なんとかうまく話して返したものの、彼のこのような単刀直入、ぶっきら棒な性格はよく詩人の性格を表わしているものと後日了解することができた。私のような凡人には真似さえできない言行なのだ。当時私は彼が歌人また剣道8段の達人であることを知る由もなかった。尊敬すべき天賦の詩人である。

さて日本語の俳句でなければ何語で詠むか？当然台湾語か台湾の公用語である台湾中国語（台湾国語、日本の外国語大学では中国の普通語と区別

している)となる。時の流れについて黄氏も漢語俳句を創作した。さすがは俳句の真骨頂を会得した黄氏であった。それゆえ漢語(台湾語、台湾国語)での創作も俳句の本質から外れてはいなかった。真の漢語俳句である。ただ惜しむらくは季語を必要とすることに拘ったことである。しかし黄氏のある季語には夏石氏のキーワードの匂いがある。それは世界俳句に通ずる道であり真の HAIKU、または俳句の本質を継承した真実の俳句というべきだと私は思う。磯田氏は黄氏の漢語俳句を日本俳句の翻訳というが私はそうとは思わない。俳句の本質を歩む HAIKU である。黄氏は「湾俳」という造語を使っている。それは大まかに台湾という環境で創作された俳句の意味で、台湾文芸と台湾語文芸の違いをさす。黄氏は台湾で日本語文芸を多く創作したが、一部の人から台湾文芸ではないと貶められた苦い経験があるゆえ漢語の台湾俳句(湾俳)を台湾で創作された漢語俳句の意味にただけである。しかし私は台湾俳句(湾俳)をあくまでも純粋の台湾語で詠まれた俳句と解釈したい。でなければ今世界で詠まれている HAIKU に添わないからだ(漢語俳句と湾俳の詳細については『世界俳句』第7号 pp101-113 または <http://oobooshingo.blogspot.tw/2010/07/002.html> をご参考ください)。黄氏は1993年、知人で時の台北県県長尤清氏に働きかけて県の文化センターで漢語俳句教室を設立し三ヶ月(28時間)を一期とし、四期続いた後、漢語による台湾俳句会を結成し、一人でも天才がいる事を望んだが、どうも当てが外れたようである。彼は同じ文の中で言う、ある人の詩を了解するためにはまずその人の平生を知るべきだという論法に関する思惟である、たとえば、作品の互選をするときに、まず作者の意見を聞かなければ、この一作の必然性やその趣、そのよさがわかる筈がない。つまり作品は作者あつての作品である、と言う主張を彼は斥けた。いうには作者の知れないミロのビーナス像を、作者の知れるモ

ナリザより美しいと彼は思うと言うのである。続いて彼は言う。小人の僻み根性かもしれないが、と。天才的思惟である、が一昔前彼は自分の作品が他人によって翻訳されるのを忌み嫌った、その彼が2011年東行(張月環)氏の漢語詩集の日本語翻訳を引き受けた。その<訳者のことば>で彼は言う:「文芸作品の他国語への翻訳は、(中略)極力これに反対してきた。その私が張月環さんの詩集『果物の詩』の日文訳を引き受けすることになった、キツネに撮まれるとはこのようなことであろうか。(中略)とまれ、翻訳にはかならず誤訳が伴う……。だがしかし、作品とは作者あつての天下である。……」と、天才のひらめきというか、私のような凡才にはわからない。またいつの日にか天才の新しいひらめきもあることだろう。

黄氏のほかにも幾たりかの漢語詩人が漢語俳句に立ち向かった。彼らは国際的にも知られた詩人である。それ故詩才、詩情については言うことはない。はっきりと俳句と銘打って出された俳句集もある。が、どうも俳句と言いがたいようである。また二十世紀末、台湾の新聞紙上でも一時俳句熱があったが、長続きはしなかった。その理由ははっきりしないが、私なりに想定すると多分俳句の本質にかんする解釈やその本質に触れる漢語俳句についての解釈や説明がたりないのが原因の一つであるが、日本国内での俳句の本質に関する論説の不定性にも由来すると考える。俳句とはと聞くと、必ず先ず有季定型を持ち出す。そしてそれは広い意味での俳句の一つの型であるとは言わないで、それが一切のように言われる。日本語を知らない外国人はこんがらがってしまい、俳句の果ては漢俳という俳句の俳の字の付いた俳句でない新しい漢詩の一型を生み出し喜ばれている。まことに悲しい喜びだが。

漢俳が俳句でないことは黄氏もはっきり言い切っている、そして朱実こと瞿麦氏もそれに触れている(私の漢語俳句に関する考えは別に載せて

ありますので【呉昭新：《漢語/漢字俳句》—漢俳、  
湾俳、粵俳、……とは？—『世界俳句』—2011  
No: 7, pp: 101-113；世界俳句協会、日本】までお  
越してください。

ネットをサーフィンすると、最近若い人たちが  
中国の漢俳の真似をして漢俳を俳句と思いこんで  
一生懸命頑張っているようだ。漢俳を漢詩の一新  
型、として詠むのはよい事だが、漢俳を俳句と間  
違ってもらっては困る、漢俳は本質と構造から見  
て日本の俳句よりもむしろ短歌に近い。でもこの  
二三年「漢俳は蘇俳よりも俳句に似ていない」と  
言う書き込みを見つけた。このグループの人たち  
は他の人たちよりもある程度俳句の本質に近づい  
ているようである（蘇俳とは旧ソ連の俳句のこ  
とで、いまのロシア俳句にあたります）。私が『《台  
湾俳句》之旅』の一文をネットに載せてからはや  
四年半が過ぎた。ネット上の延べビジター人数は  
約 4000 人に上る。けっして多い数ではないが、  
台湾にも俳句に多少興味を持つ人もいるというこ  
とだ。ほかに小生の俳句に関する文章および湾  
俳、華俳の自詠句のページへのビジターも少なく  
ない、また明らかに私のウェブサイトと呼応して  
客家語で詠まれた客俳のブログも出てきた。惜し  
むらくはまだ漢俳を漢語俳句の典型と思い違いを  
している点である。

#### （四）台湾俳句の未来：

台湾の俳句会は高齢者が多かったため、ネット  
での新しい俳句の方向を知るのにハンデイキャッ  
プがあった。でも去年あたりからタブレット PC  
が出回り、高齢者でも使いやすくなったゆえ、使  
用者も増えてきた。ネット消息の遅れによるハン

デイもそのうちに追々無くなるだろう。

最後に望むことは台湾では、黄氏が築きあげた  
台湾の俳句会を若い人たちが受け継いで真の漢語  
俳句および俳句の本質に則った俳句 (HAIKU) を  
詠むことにある。俳句の道は広い、決して一般に  
知られている有季定型だけが俳句ではない、有季  
定型、花鳥諷詠、写生の伝統俳句は俳句の一部で  
はあるが全部ではない。俳聖正岡子規さえも見逃  
した素晴らしい俳句を残した俳人たちがいる。若  
し子規が若くして短い一生を終えなければ、今の  
俳句界はもっと変わっていたであろう。日本人よ  
世界の人々がこれほどまでに日本に起源する俳句  
文化に親しんでいると言うのにどうして一部の日  
本人はそれを受け入れようとしないのだろうか。  
そして台湾の若い俳人も俳句の本質に則った  
Haiku を詠むべきである。

角帽の写真を飾り二二八 許秀梧

二二八事件：1947. 2. 28 日

#### 主な参考文献

- 1) 朱実：中国における俳句と漢俳；『日本語学』—vol.14：53-62  
(1995)—明治書院—日本。
- 2) 夏石番矢：現代俳句のキーワード；『日本語学』—vol.14：25-31  
(1995)—明治書院—日本。
- 3) 呉昭新：《漢語/漢字俳句》—漢俳、湾俳、粵俳、……とは？—  
『世界俳句』—2011 No: 7, pp: 101-113；世界俳句協会、日本。
- 4) 劉淑貞『黄靈芝文学之研究—以《台湾俳句歳時記》為中心』中  
国文化大学日本語文学研究所碩士論文、2006。(華語)
- 5) 李秋蓉：詹冰及其兒童詩研究：國立雲林科技大學漢學資料研究  
所碩士論文；2003。(華語)
- 6) 今泉恂之介：《子規は何を葬ったのか—空白の俳句史百年—》、  
新潮社、東京、日本、2011。